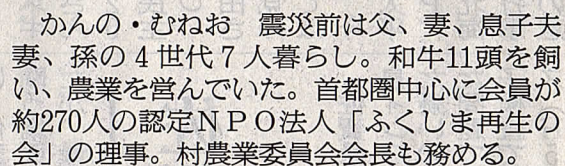


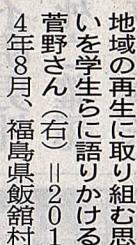
農業・「ふくしま再生の会」理事 **菅野 宗夫さん**



自宅は、福島第一原発から40キロ以上離れた避難指示解除準備区域にあります。泊まることはできませんが、昼間は家の片付けなどで自由に入ることができます。

会が誕生したのは震災3ヵ月後です。原発事故前は東京の朝市で農作物や加工品を売っていました。事故後、朝市に誘ってくれた知

週末になると、首都圏から十数人のボランティアが集まります。土壌物理学や農学が専門の大学教授やIT技術者、定年退職した会社員たち。土や動植物の放射能を継続的に測り、田んぼや山林の除染方法を探る「ふくしま再生の会」の活動です。



会の取り組みの背景にあるのは、村での暮らしに対する思い入れです。

後悔しました。振り返った父が、血の氣のないような顔をしていたからです。

11年4月上旬、まだ建物の外に出ないように言われていた時のことです。

昼ご飯の時間になって、同居する父が現れない。外を探すと、すぐ近くにある畑で草むしりをしていました。秋に植えた自家用のニンニクは、芽を出していました。

思わず「何やってるの！」と強い口調で言っ

自宅周辺の田畑は、私が生まれて間もなく父が開拓した土地です。牛を飼い、その堆肥たいひを使って、何十年もかけて土を肥やしてきました。家族が食べる野菜を育てるのが父の役割でした。それを父は失いました。

私たちにとっては、作物が芽生え成長すること、それを食べてもらうことが喜びであり、居場所です。そ

 避難指示区域

飯館村は、帰還困難区域（年間放射線量50μシーベルト超）▽居住制限区域（同20μ超〜50μ以下）▽避難指示解除準備区域（同20μ以下）の3つの避難指示区域を抱える。村では昨年、帰還困難区域をのぞく区域で国による住宅周辺の除染が本格的に始まった。

れはほかの農家だって同じです。

国の農地除染は遅れ、帰村や農業再開のめどはたつていません。時間がたつほど「村に戻りたい」「農業をしたい」という村民の思いはなえてしまう。私たちは待つていられないのです。

活動を始めたころは「なんで学者なんて活動に入れるんだ。どうせデータは改ざんされて出されるんだべ」と責められました。事故直後、「避難することはない」と言っていた学者もおり、その不信感でした。

1年ぐらいうると反応が変わった。村や地域の集まりで声がかかるようになりました。「家の周りや室内の放射量を調べてほしい」「会

放射線量
ーベルト

○ 固定型で測定
△ 可搬型で測定

0.22
郡山 0.11
浪江 (下津島) 0.436
飯館 0.318
南相馬 0.11
浪江 (赤宇木) 3.114
福島第一原発
いわき 0.07

18日の測定値

活動通じて理解広がる

春、実験田にはった水のあたたかさや土の感触を確かめる。そのときの菅野さん夫妻のうれしそうな顔が印象的だった。田植えや稲刈りでボランティアは村の農家から手ほどきを受ける。事故で何

が失われたのか。福島以外の人に理解してもらうことが大事」と菅野さんはいう。

避難地域での活動に「放射線の影響は大丈夫か」と懸念する声もある。それでも参加する一人は「来るたびに楽しみ、学んでいる」と話す。活動を通じ、事故を自分のことと考える人が広がりつつある。

（福島総局 清野有希子）

り合いのついで、現理事長らが村を訪れた。「できることは何か」と声をかけられ、その場で「一緒にやってみよう」と決めました。

国の除染方法は、表土を5^{センチ}程度はぎ取ります。汚染土を入れる袋が増えて優良農地に置かれていく。いま置かれているのは村全体の優良農地約800^{ヘクタール}の3分の1にのびります。

法を試しています。地下水には浸透しません。汚染された土とそうでない土を分ける取り組みです。

昨年はようやく、試験的に栽培したコメが地元農協の放射性物質検査を受けられることになった。検出限界値（1^{キログラムあたり}25^{ベクレル}）を下回り、初めて試食することができました。

身近な場所の放射線量を

会では、田植え前の田んぼに水を入れてかき混ぜるしろかきに合わせ、放射性物質がついた泥水を浮かせ、田んぼの脇に寄せる方少、和らいだ気がします。

見学に来る学生から元気をもらうこともあります。「教師になった時、被災地を自分で見ていなければ本当の姿を生徒に伝えられない」という関西の大学生。祖母が農業をしているという別の大学生は「おばあちゃん、土をさわるって言われたらどう感じるか」と涙ぐんでいました。私たちが何を失ったのか、感じとてくれたと思います。

事故前は長男家族と一緒に暮らしていました。孫たちは稲刈りを体験しながら自然の恵みを学んでいた。今は学校などの関係で別々に避難しています。会の活動をする土日は学校がないので孫に会いたいですが、今できることをやって村を次世代に渡したい。そう思うって活動しています。

